

富屋特別支援学校

地域連携教員	見持 英児 教諭	地域連携教員歴	3年
--------	----------	---------	----

1 コーディネーターについて

○富屋地区まちづくり連絡協議会

富屋特別支援学校がある富屋地区には、地区の自治会、青少年育成会、婦人会、老人会、社会福祉協議会、小・中学校、特別支援学校、保育園・幼稚園・認定こども園、文化保存会、地区市民センター等の各種機関の代表で組織された「富屋地区まちづくり連絡協議会」がある。協議会では、協議会主催のまちづくりに関連するイベントや地区の年間行事等をまとめている。参加している各機関は、互いに連携しながらイベント・行事等に参加・協力している。富屋特別支援学校は、この協議会に地域連携の調整を依頼していることから、協議会が地域のコーディネート機能を果たしていると言える。

2 コーディネーターとの連携の実際

○連携している内容

- ・協議会参加機関である富屋地区市民センターを介して、各自治会の回覧板に学校だよりや行事の案内等の通知を入れてもらっている。反対に、地区の会報等の案内もセンターを介して送られてくるので、学校と地域の情報共有が図られている。
- ・特別支援学校やその教育について理解を深めてもらうため、協議会において、学校や地域連携教員について説明する機会を作ってもらっている。
- ・「とみやふるさとまつり」において、作業製品の展示・即売を行っている。また、同まつり内の文化祭において、生徒の作品を展示している。

○コーディネーターとの連携を深める工夫

これまで総会等の協議会の集まりには学校長が代表として参加していたが、地域の方々に顔を覚えてもらうため、地域連携教員も一緒に参加するようになった。また、関係機関の関連行事やイベントにも地域連携教員が参加し、地域の人々とのネットワークを広げている。まず顔のつながりを作り、地域連携教員として積極的に協議会に関わることで信頼関係が生まれ、連携が深められている。

3 成果と課題

○成果

最も大きな利点は、地域側の窓口が明確であり、連絡調整の時間と労力が縮小され、地域連携をスムーズに進められることである。

県立学校では、地域をどう捉えるかが難しいところだが、学校が所在する地域や近隣の小・中学校とのつながり、学校や生徒について理解してもらうことは大切であると考え。富屋特別支援学校では、まちづくり協議会が中心となり、学校同士や学校と地域のつながりを作ってくれている。このことで、他の学校や地域住民・団体等に特別支援教育を理解してもらう機会が生まれ、ひいては、地域から学校の教育活動への幅広いサポートが期待できる。

○課題

他の教員とのつながりを作る機会があまりない。そのため、定期異動などにより地域連携教員が変わった際の引継ぎ等に課題が出るのではないかと考える。

4 その他

○どのようにしたら、コーディネーターとの連携がうまくいくか

一人にコーディネーターを任せるとはならず、地域、学校の双方の代表が集まれる会議や委員会等を作って、そのメンバーがコーディネーターの役割を担えるといいのではないだろうか。複数でコーディネーターの役割を担うことで、一人一人の専門性を生かすこともでき、より充実した連携が図れるようになるのではないかと考える。

○地域連携教員として、力を入れてきたこと

地域に開かれた学校として、ボランティア養成講座や学校開放等、これまで地域を学校で受け入れる活動は行ってきていたため、地域連携教員設置後は、受け入れるだけでなく、学校が外に向かって働きかけることが大切だと思い、地域行事等へ積極的に参加してきた。その結果、とみやふるさとまつり実行委員会から声がかかり、昨年度から、「とみやふるさとまつり」で作業製品の展示・即売ができるようになった。まつりには、学校のことをよく知らない人も多く訪れている。まつりでは、作業製品を手にとった多くの方々から称賛を得た。学校を理解してもらうとてもよい機会であったと思う。一方、まつりへ参加できたのは教員だけであり、まだ、児童生徒の参加につながっていない。今後も、地域へ参加しながら、児童生徒がどのように関わっていけるかを検討したい。そして、児童生徒も教員も地域と関わることで、学校が地域の一員としての役割を果たしていければと思う。



「とみやふるさとまつり」での展示即売会ブースの様子